



# ナマズの知恵袋

平成30年(2018年)8月1日  
編集・発行 滋賀県立図書館

## 夜空をみあげて・・・

2018年は、15年ぶりの火星大接近やふたご座流星群の極大など、見逃せない天文現象が数々あります。

この機会に思い切り夜空を楽しんでみませんか☆彡

### ★2018年のこれから起こる天文現象★

☆8/13 ペルセウス座流星群が極大 ☆9/10 ジャコビニ・ツィナー彗星が地球最接近

☆12/14 ふたご座流星群が極大 ☆12/16 ウィルタネン彗星が地球に最接近

今年はどうな天文現象があるのかな?具体的に知りたい!

●『天文年鑑 2018年版』 天文年鑑編集委員会編 誠文堂新光社 2017年 R-4405-テ  
前年に起こった天文現象とその年に起こる天文現象について観測結果や写真などが掲載されます。

◎『天文ガイド』 誠文堂新光社 P

1月号にその年の注目される天文現象の特集が組まれます。

●『これから見られる日食と月食データブック 2012-2050』

片山真人著 誠文堂新光社 2012年 G-4447-カ

2050年までの日食と月食の詳細データが掲載されています。

○国立天文台 <https://www.nao.ac.jp/>

「天文情報」→「ほしぞら情報」→「カレンダー」でその日時に現れる天文現象がわかります。



### ★まずはこれから! 基本的資料★

●『理科年表 第91冊(平成30年)』 国立天文台編 丸善出版 2017年 R-4059-リ

自然科学分野全般を網羅したデータブックです。暦部、天文部、化学部などで構成されています。

●『天文・宇宙開発事典 古代-2009 トピックス』 日外アソシエーツ刊 2009年 R-4403-ニ B.C.2700

年から2009年までに起こった国内外の天文・宇宙開発関連の事項を収録した事典です。

●『天文学辞典』 岡村定矩編 日本評論社 2012年 R-4403-オ

天文学の基本的な用語、人名、組織名等が解説されています。

○「天文学辞典」 <http://astro-dic.jp/>

日本天文学会が運営しているサイトです。上掲の『天文学辞典』をインターネット上で検索できます。

●『天文学大事典』 天文学大事典編集委員会編 地人書館 2007年 R-4403-テ

天文学に関する基本的な事象に関して重要度に応じて大項目、中項目、小項目に分類しています。

○「宇宙情報センター」 <http://spaceinfo.jaxa.jp/>

JAXA 宇宙教育センターが運営し、宇宙開発に関する5,000タイトル以上のページを公開しています。

○「宇宙のポータルサイト ユニバース」 <http://www.universe-s.com/>

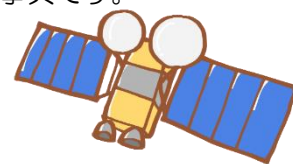
日本の宇宙開発を担っている8機関の活動内容や採用状況等、多岐に渡ったウェブサイトを紹介しています。

### ★星を見るために・・・★

●『月・太陽・惑星・彗星・流れ星の見かたがわかる本』 藤井旭著 誠文堂新光社 2007年 G-4420-フ

●『宇宙をみせて 新版 天体観望ガイドブック』 天文教育普及研究会編 恒星社厚生閣 2013年

G-4420-テ



## 歴史に記録された天文現象

有史以来、多くの天文現象が記録されてきました。夜の灯火がほとんどない時代、多くの人たちがその天体ショーに心を奪われたことでしょう。では、ちょっとその記録をのぞいてみましょう。

### ◇しし座流星群 ～扶桑略記～

康保4年(967年)9月9日 「(前略) 普天之下。衆星自東流西。走散無間。形如刀劍。」

『国史大系 12 扶桑略記 帝王編年記 新訂増補』黑板勝美編輯

吉川弘文館 1965年 2-2100-12)

### ◇大流星の記録 ～明月記～

治承4年(1180年)9月15日 「(前略) 夜漸く半ばならんと欲す。天中光る物あり。其の勢、鞠の程か。其の色燃ゆるが如し。(中略) 須臾にして破裂し、炉を打ち破るが如し。火、空中に散じらんぬ。若しくは是れ大流星か。驚奇す。(後略)。』

『訓読明月記 第1巻』藤原定家著 今川文雄訳 河出書房新社 1987年 G-9154-フ)

### ◇ハレー彗星の出現 ～吾妻鏡～

貞応元年(1222年)8月2日 「(前略) 彗星戌方に見ゆ、軸星の大さ半月の如し、色白くして光芒赤し、長さ一丈七尺餘」

『吾妻鏡 5』龍肅訳註 岩波書店 1997年 G-IY-118)

そんな連綿と書き継がれてきた天文記録を調べるには次の資料が便利です。

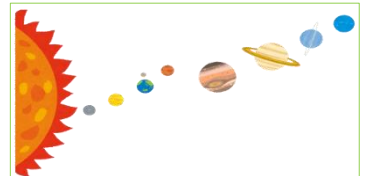
#### ●『日本天文学史 上・下・総覧』神田茂編 原書房 1978年 2-4490-カ

(慶長5年)1600年までの日本の天文現象に関する古記録を天文現象ごとに分類して原文を年代順に配列。総覧ではすべてを年代順に並べているので、さながら天文歴史年表のようです。

#### ●『星の古記録』斉藤国治著 岩波書店 1982年 2-4430-サ

#### ●『宇宙からのメッセージ』斉藤国治著 雄山閣出版 1995年 2-4402-サ

斉藤国治氏の著作では、古今東西の記録を多く紹介されています。



## 湖国の天文学者

『滋賀県百科事典』(滋賀県百科事典刊行会編 大和書房 1984年 S-0300-84)には、鉄砲で有名な国友一貫斎をはじめ、近代では山本一清、中村要など天文学に関係する人々も取り上げられています。

国友一貫斎(1778~1840)は、望遠鏡を自作し太陽黒点の連続観測を行いました。一貫斎の製作した望遠鏡や観測図は『江戸時代の科学技術 国友一貫斎から広がる世界』(長浜市立長浜城歴史博物館編刊 2003年 S-5561-03)に掲載されています。子供向けの伝記「心血をそそいだ天体望遠鏡と観測」もあり、『てのひら文庫 滋賀県5年』(滋賀県小学校教育研究会国語部会編 文溪堂 1992年 SP-3700-5)に収録されています。

山本一清(1889~1959)は、京都帝国大学教授、初代花山天文台長をつとめる一方、東亜天文学会を結成するなど活躍しました。また退官後は、私費を投じて大津市に山本天文台を創設しました。山本天文台については、『失われた近代の知の遺産 山本天文台(第一観測棟・第二観測棟・研究棟)記録保存調査報告書』(山岸常人編集 Office 萬瑠夢 2013年 SB-4411-13)にまとめられています。

中村要(1904~32)は、望遠鏡用レンズの製作で知られ、その生涯は『中村要と反射望遠鏡』(富田良雄著 ウィンかもがわ 2000年 S-4411-00)に紹介されています。